

その夜、私は、部屋の者に、

「今晚これから裏門からいつてくるから、後は宜しく御願ひ致します。もし明朝になって、私が部屋に寝て居なかつたら、うまく成功したと思つて下さい。」

「まあ気を付けていつてきな、そして用事が済んだら、早く帰つて来な」

と部屋の親父が、私の為に弁当を作つてくれた。私は親父の心尽くしをあり難く受けて、十月の月が山の彼方に昇る頃、仙太の舎へいつた。

仙太は縁の下に隠して置いた、船を漕ぐ艫の代りをする物を取り出して、金山の来るのを待つていたが、いつ迄で待つても、金山はこなかつた。私はたまりかねて、

「仙太、金山は遅いじゃないか」

「まさか忘れた譯（わけ）でもあるまい。」

「いつて見るか」

と、仙太と私は、金山の居る白鳥寮（はくちょうりょう）へ出かけていつた。

金山は懸命になって、足ごしらえをしていたのであつた。三人はロカイを、一本づつ持つて外へ出た。寝静まつた、日出（ひで）の広場を通つて、炊事場の横を曲り、浜辺の道を、医局の方へ向つて、少しづつ離れていつた。仙太が先頭になり、次に金山、私が最後になつていつた。仙太は印ばんでんに地下足袋をはき、金山は国防服に戦闘帽をかぶり、私は洋服にゴムの長靴をはき、足が悪いので、どうしても遅れがちであつた。仙太は右の足が義足であつたが、背が高くコンパスが長く、歩くのも早かつた。

保育所の所まで来ると、前方から人の来るけはいがしたので、三人は慌てて後戻りをして、本館の表の、松林の中に姿を隠した。人が通り過ぎると、やや暫くしてから、また道路へ出ると歩きだした。月は中天にあつて、三人の逃走者を哀れむ様に、時々、雲間に入った。官舎の裏の高い山が黒く見えていた。

入江に寄する浪の音にも、私の心は戦慄した。三人はやつとの思いで、目的の船越（ふなこし）の棧橋に来た。船着場には、月光が青く照らしていた。仙太と金山は大きな船に乗りうつり、幅の広い渡り板を降して、小船にかけ荷物を積み込んだ。

仙太はかねて用意の海軍ナイフを、腹かけのカクシから取り出し、船を繋いである、麻の太いロープを切り始めた。私は棧橋の上で見張りの役をしていた。ロープは何なく切れた。船を出そうとしたが動かない。よく見ると棧橋の杭に、鉄の鎖が繋いであつた。仙太は船の中に座つて、考えていたが、やがて荷物の中から、泥棒の七つ道具を出して、クサリに掛けてあつた錠前を、仙太は剛力でぶち壊した。その時仙太は、左の拇指を怪我をして、彼の指からは血がダラダラ流れていた。仙太は痛そうに顔をシカメながら、

「おいも大丈夫だ。船のクサリは、はずれたぞ。さあ、長尾、こつちへこい。」

私は仙太に呼ばれたので見張りをやめて船に乗りうつつた。そして三人が力一杯押すと、船は何なく棧橋を離れた。

この船は、果樹園行きの肥し船であつた。幸の事には、艫が船の中に置き忘れてあつたので、またたく間に船は沖へ漕ぎだす事が出来た。三人は命掛けて沖へ沖へと船をあやつつた。